



# エクソシスターズ！

---

「エクソシスターズ！」

矢立 丈二

## 第一話「魔を狩る者たち」

深夜のビルの廊下を女性が逃げていた。

恐怖に顔を引きつらせて、おまけに泣きべそをかいている。

しかし本人には気の毒だが、昼間出会ったら笑ってしまうような形相だ。

本人は真剣だが傍から見るとおかしいというアレである。

しかも、その格好が異様である。

薄いベールのようなサリーを纏い、長くきれいな赤毛の髪にはキラキラ光る粉のような化粧がしてある。 巷の怪しげな占星術師のような衣裳である。

笑顔で見つめられると思わずホッと気持ちが安らぐようなおっとり美人だが、この格好でこの形相である。 普通の夜道で出会ったら、思わず吹き出すか、ギョッとして辺りを見回すに違いない。

しかし、ここは深夜のオフィスビルの廊下である。

それに、彼女の背後から迫り来るモノの見れば笑ってはいられないだろう。

「ふえーん、助けてくださあい」

思わず腰がくだけるような情けない悲鳴を上げながら駆けてくる彼女の背後には、食肉獣を思わせるような獰猛な口を開け全身ゼリーのような透明な怪物が迫っていた。

紹介が遅れたが、彼女はマリー・グッドラック、20歳。 それでもって、予想通り占いを生業にしている。

なぜ占い師の彼女が、こんなところで怪物に追いかけているのか？

説明している暇はない。 今にも襲われそうなのである。

マリーは、廊下の突き当たりの、二股に分かれたところで立ち止まり、占いに使う星座のマークが描かれたカードの束を取り出して慌てて占いを始めた。

「えーと、吉方は...っと。 右ですわね」

悠長なことを言っている。 しかし、依然半べそをかいているのは変わらない。

怪物の体から生えた触手が、彼女の立っていた床を鞭のように砕く。

一瞬早く、彼女は一步踏み出していた。 トロいんだか、感が鋭いんだかよくわからないが、とにかく怪物の痛烈な一撃を避けたことになる。 確かに吉方だったらしい。

そのまま廊下を走りだして、十字路に差しかかる。

その角の端の方に、チョークで雑な円を描いてしゃがみこんでいる黒い影があった。

マリーは、それを見つけると軽い安堵で半べその鼻をすすりながら（結局、どっちに転んでもべそをかいているわけだ）、その影に駆け寄った。

「ああーん、リリィさあん。入れて下さあい」

呼ばれた影は、伏せていた顔を上げた。意地悪そうな目をした美人である。

裾が足首まである黒いドレスに長いソバージュの黒髪、そしてこれまた黒いマントを羽織っている。ようするに、真っ黒である。

「あきまへん。これは一人用どっさかい」

リリィ・ウィッシュボーン18歳は、面倒くさそうにスコットランド訛りで言った。

よく見ると、彼女の周りにチョークでいい加減に書かれた円は、二重になっていて何やらミミズがのたくったような文字が書かれてある。

そう、魔の侵入を阻む魔法陣。つまり、彼女は結界を操る魔女なのである。

そんな呑気なやりとりをしているうちに、怪物が追いついてきてしまった。

「シャギャーッ！」

怪物が、咆哮を上げる。

「何してますのや、順路はあっちどす」

リリィは、どこから出したのか矢印を書いたプラカードを、廊下的一方に向けてマリーを急かす。

二人を目前にしていきり立った怪物の触手が、リリィを襲う。

ばしっ！

魔法陣の結界の力が、怪物の触手を弾き返す。

怪物が、たじろぐ。

「ほらほら、もたもたとったら怪我しますえ。ここは、うちに任して、早よう行きなはれ」

「すびばしえーん。お願いしますう」

鼻水をすすりながらそう言うが早いか、マリーは、後も見ずに駆け出した。

「シャーッ！」

怪物が、リリィを威嚇する。しかし、結界の力を恐れてすぐには手を出さない。

リリィは、ふっとため息をつくと両手を合わせて前に突き出し、口の中で何かつぶやきだす。

攻撃呪文を唱えているのであろうか。

『あんさんの獲物は、あっちどす。あんさんの獲物は、あっちどす』

よく見ると、手には先程のプラカードがしっかりと握られている。

もちろん、矢印の先にはマリーの後ろ姿が……

むろん、怪物が言葉や矢印の意味を理解できるとは思えないが、眼前の手強い獲物より、目の前から駆け出した間抜けそうな獲物の方が料理しやすいと思ったのだろう、すぐさまマリーの後を追いかけて始めた。

「ひえーっ」

リリィの安否を気遣って、恐る恐る後を振り返ったマリーは、物凄い勢いで自分を追ってくる怪物の姿を認めて、悲鳴を上げながら左右の足の往復運動を速めた。

『リリィさん、ひどおーい』

凄いい勢いで廊下を駆けていく一人と一匹の後ろ姿を見送りながら、リリィがインカム（ヘッドホン型のトランシーバーである）に向かって報告する。

「お客さんが、今そっちへ行かれましたえ」

魔法陣を出ると、廊下にチョークでスラスラと模様と文字を描く。

「封鎖完了。うちのノルマはお終いどすな」

方円に戻ると、またしゃがみこんでポケットウイスキーをあおる。

「今夜は、えらい冷えますなあ」

彼女は、夜の冷気よりも冷たくそう言った。

ビルの保安室のモニターでマリーのマラソンチェースを見ていたミレーヌは、ストップウォッチ付きの懐中時計をちらりと見て、クスッと笑いを浮かべた。

「また1秒短縮ね。そのうち、オリンピック出場も夢じゃないわ」

彼女は、ミレーヌ・ビショップ、17歳。スリーピースのスーツにロングコート姿の男装の麗人である。銀髪ショートカットに知的で鋭いブルーアイが、よく似合っている。

インカムのスイッチを入れる。

「美那。マリーが行くわよ、用意して」

別のモニター画面の中で、巫女姿の少女がうなずく。

「インカムを着けている時は、ちゃんと返事しなさい」

再び少女がうなずく。

ミレーヌはため息をつくのと、となりのモニターのリリィに指示する。

「リリィ、移動して。囲い込むわよ」

モニターの中のリリィが、不服そうにのそりと立ち上がる。

「面倒おすなあ」

「ほらほら、何時もニコニコ笑ってお仕事でしょ」

「そら、社長《マリー》のモットーですやろ」

「彼女《マリー》は、今それどころじゃないみたいねえ」

「いけずな、お人やなあ」

「仕事は、楽しんでやらずにちゃ」

「それ聞いたらマリーはん、嬉し泣きしはりますえ」

「びえーっ」

嬉し泣きどころじゃないマリーは、噴水のように涙を撒き散らしながら階段を駆け落ちるように疾走していた。

「シギャーッ！」

複雑な形態のくせに、マリーに劣らぬスピードで追いかけている怪物が、咆哮をあげている。

お互い、スタミナはなかなかのものである。

「ええーん。涙で前がよく見えませえん」

涙で歪んだマリーの視界に、赤と白の模様が揺れる。



ドップラー効果をともないながら、ジェミーの傍らをマリーが駆け抜けていった。

そのままホールを突っ切って、反対側の彫刻に激突しそうになる。

あわや激突寸前、ひょいっとマリーの襟首を掴んで引き止める者がある。

今まで、ホールの中央であぐらをかいていたジェミーである。

座っている横を全力疾走で駆け抜けていったマリーに、あっさり追いついて止めてしまった。

大した敏捷性である。

さすが、伊達に脳筋娘ではない。(ビクビクッ)

「ジェミー、法円から出ちゃだめ！」

いつの間にかミレーヌが来ている。

ジェミーが今まで座っていたホールの中央には、リリィによって精緻な魔法陣が描かれていたのである。

これだけ精密な魔法陣を、ものぐさなリリィに描かせるのは一苦勞である。

無駄にしたとあつたら、一週間はネチネチと嫌味を言われるだろう。

「シギャーッ！」

式神ともつれあつた怪物が、ホールに躍り込んでくる。

ホールを破壊しないように、美那が式神を消す。しかし、美那は知らなかった。ワナが不完全な事を。

怪物は、真直ぐとミレーヌたちに向かってきた。

「ちっ、しまった」

ジェミーが、バスターソードを抜き放つ。

「殺しちゃだめ！」

ジェミーを制したミレーヌに、怪物が迫る。

ジェミーのバスターソードには、魔法コーティングが施してある。

それによって、精神世界《アストラル・サイド》に本体を置く怪物でも精神体ごと一刀両断に出来るのである。

悠然と立つミレーヌを、怪物の触手が鞭のように襲う。

剣を構えてカバーに入ったジェミーの目の前で、石が砕け散った。

ミレーヌたちの横にそびえ立っていた彫像が腕を伸ばして、ミレーヌたちをかばったのである。石の破片は、怪物の触手に砕かれた彫像の手であった。

彫像は、ゆっくりと台座から降りると怪物の前に立ちはだかった。

「万が一を考えて、彫刻に生命を刻んでおいたの」

ゴーレム。無機物にかりそめの生命を吹き込む、錬金の秘術。

若干12歳のとき、物理・化学の博士号を取った鬼才、ミレーヌの真の顔は、古代の英知を極めた錬金術師であった。

そして、それに負けず劣らず美人である。

「フォローを、ありがとう」

誰に言ったのか(たぶん、ジェミーと彫像に言ったのだろう)、ミレーヌは微笑んだ。

「あーあ、どないしますね、この始末」

今頃になってやってきたリリィが、ホールの反対側で呆れ顔で立っている。

美那が横でうなずいている。

「うちの魔法陣、無駄にしたら堪忍しまへんで。 それ描くのに、うちがどんだけ苦労したか...  
... おまけに、その彫刻、なんぼすると思てはるんどすか。 ぐちぐち.....」

なるほど、ネチネチとうるさい。 美那が、ため息を吐く。

「うるせえ、文句があつたら、怪物《こいつ》を倒してからにしやがれ！ 大体おめえは、たいして働かねえくせに文句ばかり言いやがって」

ジェミーが、切れた。

「うちが、いつ働かへんどすって。 何年何月何日、何時何分何秒か言うてみなはれ」

リリィが、しれっとして言う。

「あのお、お二人とも、そういう状況では.....」

マリーが、おろおろしながら小声で割って入る。

「シャーッ！」

二人の剣幕に気圧されておとなしくしていた怪物が、マリーに吠えかかる。

「きゃーっ、すいませえん。 もう、言いませえん」

「誰に謝ってやがんだ」

ジェミーが動いた。

マリーに突っ込みを入れながら、一気に怪物との間合いを詰める。

すかさず、ミレーヌが全員に合図のいちべつを送る。

美那が、折紙の両端を摘んで引っ張ると、ぽーんと怪物に向けて放る。

引き伸ばされ蛇腹になった折紙が、大蛇に変化して怪物に巻きつく。

突っ込んでいくジェミー。

大蛇に巻きつかれた間から、触手を繰り出す怪物。

「ジェミー！」

ミレーヌが、ジェミーに鋭く呼びかける。

「わかってるぜ。 殺すなってんだろ」

触手を剣で払い除け、肩から思いきりぶつかる。

そのまま、脚力を使って一気に数メートル押し切る。

ラグビーやアメフトのショルダータックルであるが、威力が違う。 ジェミーの力を持ってすれば、スクラムを組んだ相手を一人でゴールまで押し込んでしまうだろう。

つまり、ジェミーはただの格闘技バカではなかった。 超人的パワー、それが他のメンバー同様ジェミーが持っている能力なのである。

マリーがメンバーを集めたとき、一種の靈感が働いた。 彼女はそれを、星の啓示と呼んだが、とにかく彼女のもとには特異な能力を持った者が集まった。

しかしマリーは、相手の才能を見抜いて集めたわけではない。 愛を感じた者（マリー談）を、持ち前の人の良さで口説いたにすぎないのである。

つまり、それが彼女《マリー》の異能力だったのだ。 「幸運のマリー」と呼ばれた由縁で

ある。

しかし、その割に彼女自身は不運な目に遇うようだ。 自分のことは当たらないという、占い師の宿命かもしれない。

「うりゃーっ！」

最後の一押しでジェミーは、乗用車並みの重量とパワーを持つ怪物を中央の法円に押し込む。法円の淵では、タイミングを見計らったように、リリィとミレーヌが呪文の詠唱に入った。このあたりの切り替えの早さが、ただのチームと違うところである。

日ごろ突っ込みあって仲が悪いように見えるが、お互い信頼しあっているからこそなのである。

呪文の詠唱とともに、法円の淵から光の壁が出現する。

怪物がリリィとミレーヌに向かって、鞭の一撃を振るうが光の壁に弾き返される。

二人の呪文が完成した。

光の壁が、急激に中空に向かって収束し、ピンポン玉くらいの光の球に怪物を封入してしまう。ジェミーが座っていた法円は、怪物捕獲用のワナだったのである。

ミレーヌが、光の球を魔法コーティングしたステンレス壇（通称、魔法壇）に捕獲すると、涼しい顔で告げた。

「封印、完了」

「なんで、こんなに手間をかけなきゃなんないんだ。 出合い頭に、ぶった切っちゃ早いのによう」

「あんさんが、おとなしゅう囷になって法円の中に座とったら、もそっと早よう済みましたんどうす」

ジェミーは、ホールに追い込まれた怪物をワナに誘い込むための囷だったのである。

「なんだと、もういっぺん言ってみやがれ」

「やれやれ頭だけかと思たら、耳も悪おしたんか」

「このヤローっ！」「ぶっ！」

リリィに突っ込もうとしたジェミーの顔を押し止めて、ミレーヌが説明する。

「簡単に始末してしまったら、高い料金を取れないでしょ？ これは、あくまでビジネスなんだから、演出も必要なのよ」

つまり、ある程度の料金を取ろうと思ったら、高そうに見せる必要があると言っているのである。いくら高度な技術を駆使しようと、門外漢には見た目でしかわからないのである。簡単に見えたら、客は料金を出し渋る。

手間をかけて獲物を捕獲するには、もうひとつ理由がある。 退治した証拠が、必要だからである。 精神世界《アストラル・サイド》に本体を置く怪物は、殺してしまうと肉体も消滅してしまうのである。 以前、死骸がないのを理由に料金を踏み倒されたことがあった。 クライアントが大企業ほど、その傾向が強い。 そこでそれ以後、生け捕りにすることにしたのである。 もし料金を踏み倒されたら、封印を解いて戻してやればいい。 そうすれば、いずれ泣きついてくるだろう。 その時は、倍の料金をとってやればいいのだ。

ここまで説明すれば、もうおわかりだろう。彼女たちは、精神世界《アストラル・サイド》からこの世界に害を為す怪物たちを始末する、悪魔払い師《エクソシスター》なのである。

「それに、もっと手強い相手に備えて日ごろから訓練しておくことも必要だわ。コンビネーションとチームワークの強化にも役立つしね」

ミレーヌが、つけ加えた。

「訓練ねえ。確かに、囃《マリー》の足は速くなったみたいだけど」

マリーが、目をうるうるさせながら、顔を出す。

「ええーっ、また、わたし囃だったんですかぁ」

この期に及んで、まだ分かっていなかったらしい。

「最初から説明しておいたら、あなた絶対引き受けないと思って」

全員が、大きくうなずいた。

大粒の涙をポロポロ流しだしたマリーを無視して、ミレーヌが壁の監視カメラを視線で示すと言った。

「さあ、保安室の記録ビデオを回収して帰るわよ」

全員が引き上げる間中、マリーのしゃくり上げる声がひときわ大きくホールにこだましていた。

「エクソシスターズ！」

矢立 丈二

## 第二話「マッド・ティーパーティ」

ウッドクラフト・ストリート。こじんまりと落ち着いた事務所が立ち並ぶ、地方都市のビジネス街である。

その13番地に、彼女たちのオフィスがある。五階立ての老朽アパートを、事務所兼・住居として借り切っている。と言っても、8部屋しかなく、いつ倒壊してもおかしくない老朽建築なので他に借り手がないだけなのだが……。

建物の壁に取り付けられた看板に大きく書かれた社名は、社長《マリー》の名前をとって「グッドラック悪魔払い《エクソシスターズ》社」と言うのであるが、元々一階にマリーが占いの店を開いていた（今でも仕事がない時の重要な収入源である）うえに、彼女たちの新商売のせいで「魔女の館」とか、番地から「ウィッチーズ13」と呼ばれることが多い。

とにかく、ウッドクラフト通り13番地には魔女が住むというのが、この街に住む者の共通の認識であった。

「ほなこれ、お薬どす。 一日一包みずつポットに入れて、煮出したのを朝晩に分けて飲んどくれやす」

リリィは普段、一階のマリーの占いの店の一角で、魔法薬の店を営んでいる。今日も、近所の老人がリリィの薬を買いに来ていた。

「おお、ありがとう。 リリィさんの薬はよく効くからのう」

老人は、リリィの渡した紙袋を大事そうに受け取ると、嬉しそうに微笑んだ。

魔法薬というのは、魔女の作る薬で、草根木皮や動物あるいは鉱物を使った生薬である。 起源は定かではないが、東洋の漢方薬やアーユルヴェーダの薬草にあるとする説も一部にはある。

普通、魔法薬というと魔女が魔術やサバトに使う薬を指す。 古い文献には、箒の柄に魔女の塗薬を塗り裸でまたがり遠くの山まで飛行した魔女の記録が残っている。 しかし他方、白魔術を使う魔女や魔道師によって人々の病気治療に用いられる事もあり、その名残が今日でも民間薬やハーブとして親しまれている。

中世、大々的に魔女狩りを行なって魔術の類を弾圧したキリスト教修道院でも後世、ハーブを栽培して人々の病気治療に役立てたという記録が残っている。

現代では、それら生薬の有効成分を抽出、化学合成して新薬を開発する例も多く、以前アフリカの祈祷師が使う魔法薬からエイズの特効薬を創ろうとする研究が新聞記事になった事もある。

しかし、生薬・魔法薬の多くは、薬草単体の薬効だけではなく、その材料の組合せに秘密がある事が多く、魔女狩りや伝承者の途絶によって失われた物も少なくない。

リリィは、その数少ない伝承者の一人であった。

「お大事にしとくれやす」

リリィは、笑顔で客の老人を送り出すと、隣のオフィス兼居間のドアを開けた。

窓際のアンティークのチェステーブルの前に座って本を読んでいたミレーヌが、ページから軽く視線を上げて迎える。

「お客さん、帰った？」

傍の応接セットの背の低いテーブルの前では、絨毯の上にちょこんと正座した美那が熱心に折紙を折っている。

リリィは、チェステーブルのもう一方の椅子を引いて腰掛ける。

「お帰りやした。 えーと、あんさんの番どしたな」

そう言いながら、差しかけのチェス盤をじっくりと眺める。

ミレーヌが、手にした古めかしい皮張りの魔道書の紙面をリリィに向ける。

「ねえ、この呪文の発動のメカニズムなんだけど」

リリィは、差出された本をちらりと見ると、また視線をチェス盤に戻す。

「ドラゴンバスターどすか。 それは危ないから止めときなはれ、言うてますやろ。 それより、早よ差しとくれやす」

ミレーヌは、無造作にビショップの駒を進めると、続けた。

「それは、ここの制御法をわざと秘してあるからじゃないかしら。 たぶん、発動の技法を秘してあるのと近い隠蔽法だと思うわ。 あ、今のチェックメイトね」

リリィは、いくつかの駒の上に手をさまよわせる。

「だから、危ないんです。 それは、正式に伝承を受けるか、オリジナルの魔道書を手に入れないかぎり使えないようにしてあるんですから…… 詰んどるやおまへんか」

リリィが、チェス盤に突っ伏し、ミレーヌは今週7戦7勝目の王手を決めた。

「なんで、勝てんのや」

魔術とは、自然の裏に潜む複雑な法則性の理解と、それを制御するための膨大な魔術体系の習得を要する、一種究極の技術である。 その技術は、魔道書に凝縮されているのであるが、みだりに使用されないように巧妙に封印されている。 それ故、この手の書物が一般の書物に紛れて古書店の片隅に置かれていても、迷信や伝説の類と区別はつかないのだが、魔道に通じた者はそこから無限の力を引き出す事が出来る。

ミレーヌは、若干12歳のとき物理・化学の博士号を取った鬼才であるが、ふとしたきっかけで錬金術の伝説に興味を持ち、あろう事かそこに秘された根源の力を独学で解明してしまったのである。 その後、マリー達と出会い、彼女達の知識を吸収していったが、出会った時点で、既にして古代の英知を極めた錬金術師であった。

それ故、伝説の彼方に埋もれた禁断の秘法を復活させる事にともなう危険よりも、好奇心を優先するくらいが無きにしもあらずであるが、それはミレーヌに限らず科学者のつねではなからうか。

それはさておき、リリィにしても、代々魔女の家系に生まれ、その一族の中でも神童と言われたほどの天才であったが、ことチェスに関してはミレーヌに未だ一勝も出来ないでいる。

前にも述べたが、魔術とは自然の裏に潜む複雑な法則性の理解と、それを制御するための膨大な魔術体系の習得を要する。 リリィとて、並みの頭ではないだろう。

多少、ぐうたらではあるが……。

しかし、ミレーヌのその有り余った頭脳パワーに再三チェス勝負を挑むには、若干パワー不足感は否めなかった。 そのストレスが、彼女得意の毒舌のエネルギー源になっているのかもしれない。あるいは、リリィの場合その頭脳パワーは毒舌に特化して発揮されているのかもしれない。 まあ、どちらでもいいけれど。

毒舌勝負なら、雪辱戦に勝てるかもと思いながらも反撃が怖そうなのでもう少しこのまま寝ようと、リリィがチェス盤の上で考えていた頭上で、重量物が床に落下する大音響がして、天井の塵が降ってきた。

「また、あの脳筋娘、バーベル放りだしたんだすな。 仕舞いに床抜けますえ」

ほっぺたに、チェスの駒をくっつけたまま顔を上げたリリィが毒づいた。

「この間、あの子の部屋の床、強度計算やりなおして補強したとこだから大丈夫だとは思うけど、建物の方が倒壊するかもしれないわね」

ミレーヌが、魔道書に目を落としたまま、他人事のように言う。

「ここで抜けた天井に潰されたら、保険でますやろか」

「さあねえ、社長に聞いてみたら」

「皆さあーん。 お茶がはいりましたよう」

ちょうどその時、アパート中に、社長兼・お茶くみのマリーの明るい声が響いた。

ご自慢のティーセットを持ったマリーが、居間兼オフィスに入ってくる。

「マリーはん、天井抜けたら労災請求しますえ」

「はあー、何の事ですか」

能天気な笑顔を振りまきながら、午後のお茶《アフタヌーンティー》の用意をするマリー。

どたどたと、がさつな足音を響かせながらジェミーが入ってくる。

「あー、腹へった。 何か、食うもんある？」

タンクトップに短パン姿で、タオルを引っかけたジェミーがマリーに聞く。

身体から、湯気が上がっている。

「うっ、汗くさ。 あんさんなあ、いい加減にせんと天井抜けるえ」

「えっ、こないだ補強したとこだぜ」

「あんさんは普通やない事を忘れたらあきまへん。 どこぞの世界に、バーベルのウエートを特注する人がおますね」

「だって、市販品だと軽すぎるんだもん。

まあ、運送は困ってたみたいだな」

「だあーっ、そういう問題やのうて——」

「ちなみに、シャフトはあたしが大学の材料工学研と共同で新材料開発したのよね。 どう、曲がりもしないでしょ」

「ああ、普通のバーだと折れちまうんで、重宝してるぜ」

「よかったわね。 あたしも、あの特許で儲かったし」

「ええわけあらしまへんやろ。 あの音が聞こえまへんか」

リリィが、見上げた先の天井がみしみし不気味な音をたてている。

「あら、ラップ音かしら」

マリーが、とぼけたことを言う。

「もう、あんさんは会話に参加せんでもよろしから」

リリィが、疲れた顔でマリーの方を見た。

マリーが、無邪気そうな笑顔でティーカップをすすめる

。

「お疲れのようね。 はい、リリィさんのはスコッチウイスキー入り紅茶ね。 これ飲んで元気

だしてくださいね」

「誰のせいで…… それに、うちのはスコッチの紅茶割りや言うてますやろ」

そういうリリィの頭上で、天井がみしっと音をたてた。

リリィは、スコッチウイスキーの壺を手繰り寄せると、カップに継ぎ足す。

「紅茶のスコッチ割りに変更や。 あんたらと一緒にいたら、生命の心配するだけ無駄やっちゅうこと忘れとったわ」

「そうそう、だからここの処の呪文公式、ちょっと教えてくれないかなあ」

ミレーヌの差出した魔道書を見て、リリィはテーブルに突っ伏してしまった。

マリーは、ほのぼのとした笑顔を絶やさず、お茶のサービスを続けている。

「はい、美那ちゃんはお煎茶で、ジェミーさんはティーオーレの大盛り。 ミレーヌさんはロイヤルミルクティーでしたね。 でも、リリィさんも苦勞が絶えないわねえ」

リリィは、返事をするのも阿呆らしいので、そのまま突っ伏している。

マリーは、そんな状況にまったく無頓着に、テーブルの上に大きなパイを得意げに乗せて見せる。

「じゃーん。 今日は、美味しーいパイを焼いてみましたあ」

おおーっ、と一同から小さな歓声が上がる。

マリーは、こう見えても料理は得意で、特にケーキ類は絶品である。 仕事のない午後のティータイムには、いつもマフィンなどを焼いて、皆を喜ばしている。

しかも、今日のパイは特に豪華版で美味しそうな香を漂わせていた。

「う、美味しい！」

切り分けられたパイに、さっそくパクついたジェミーが感嘆の声を上げた。 息も切らさず、2～3個たいらげてしまう。

優雅な仕草でロイヤルミルクティーのカップを傾けていたミレーヌが、パイの皿を手にとって香を楽しむようにしてから、一切れ口にした。

「まったくとしたパイ生地の間当りの中に、鮮烈な木の実の香がマッチして、素晴らしいハーモニーを醸し出しているわ」

美那も異義なしという風に、ちょぼちょぼと食べている。

「まあ、皆さんに喜んでいただいて嬉しいですわあ。 ねえ、リリィさんも、ぜひ一口」

皆の感嘆の声に、怠そうに顔を起こしたリリィに、マリーがにっこり微笑んで一切れのパイをすすめる。

一口味わってみて、目を見張るリリィ。

「こ、これは。 上品な生地の甘味の中に、野趣あふれる木の実の味わいが絶妙に溶け合って、まさに絶品」

甘美な味わいの余韻が、リリィの全身を満たす。

そして、至福の味わいに浸るリリィ達を、窓から差し込む午後のやわらかい陽射しがやさしく包む。まどろみに似たおだやかな時が、ゆるやかに流れている。

窓からの陽射しは、テーブルの上のティーカップに注がれた香しい紅茶の表面で反射され、キラキラと壁に光の文様を描きだしている。

皆は、誰からともなく微笑みを浮かべ見詰め合い、ケタケタと笑いだした。  
ん、ケタケタと？

壁の光のオブジェに見入っていたジェミーが突然立ち上がると、壁に掛けられ反射光に照らされた地図に駆け寄った。

「こ、この地図は！」

「それ、スーパーの景品でもらったご近所の地図ですけど」

マリーが、自作のパイを頬張りながら答えた。

「ふっふっふっ、ついに見つけたぜ。俺が30年間探し求めた、宝島の地図だ。こんなところにあったとはな」

「あんた、16歳やろ」

ジェミーは、テーブルに近寄ると、勢いよくテーブルクロスを引き剥がす。

うまく水平に引き抜いたので、ティーセットは軽い音をたてただけで、元の位置に着地した。  
「いきなり何しますのや。高いねんで、このティーセット」

ジェミーは、テーブルの上に飛び乗るとテーブルクロスを旗めかす。

「ヤローども、この旗の下、いざ漕ぎださん冒険の大海原へ」

「どないしたん、あんさん気確かか？」

「あたし達、野郎じゃないんですけど」

「何か悪いものでも食べたんじゃない？」

リリィが、ギクツとする。まさか……

ジェミーが、足をもつれさせて、腹から飛び込む形にダイブする。

そのまま、床に突っ伏して動かない。

「大丈夫ですかあ」

マリーが、おとなしくなったジェミーの身体をツンツンと突っ突いて尋ねる

。

「なんの、これしき」

ジェミーが、そのまま床の上を猛烈なクロールで、部屋の端まで泳いでいく。

が、壁ぎわでじっと動かなくなる。

「なんや？」

ジェミーは、仰向けになると、片足を高く持ち上げて叫ぶ。

「うおーっ、足がつった」

リリィが、ずっこける。

「こらあかん、あんた気をしっかり持ちや」

「そうですよ、背が立ちますよ、ここ」

「いや、そういう問題やのうて——」

美那が、クスクス笑いながら、金魚の折紙を床に投げる。すると、床から大きな背ビレが現われて、ジェミーの方へ向かって進みだす。

「うおーっ、サメだぁ」

床を泳ぎながら逃げるジェミーと、それを追う背ビレ。

「何しますね、美那」

「おかしい、変だわ」

ミレーヌが、すくっと立ち上がる。

リリィが、ギクツとする。

ミレーヌが、ビシッと指差して言う。

「あなたの仕業ね！」

「ひえーっ、すんまへん」

リリィが、頭を抱えてしゃがみ込む。

しかし、ミレーヌの指はリリィの頭上を飛び越えて、後に立っていたマリーを差し示している。

「あなたのせいね。何者なの、正体を現しなさい！」

指差されたマリーは、観念したようにベソをかきはじめた。

「えーん、すいません。実はわたし、ウサギさんだったんですう」

「へっ？」

「やはり、そうだったのか」

ジェミーが、すくっと立ち上がる。

「前々から、怪しいと思ってたんだ。俺の完璧な演技のおかげで、ついに正体を現しやがったな」

「演技だったんどすか」

ミレーヌは、やさしく微笑むと、床にひざをついてベソをかいているマリーの手を取って立たせてやる。

「謝ることはないのよ。よく打ち明けてくれたわ。実は、わたしも男だったのよ」

「あのう、もしもし……」

しかし、ジェミーは追求の手をゆるめない。

「いや、許せんな。ひどい目にあっただからな」

「えーん、許してください」

「それはそうと、あなたサメはどうしたの？」

ジェミーの後に、大口を開けたサメが迫っている。

「でえーっ、そうだった」

再び床に飛び込んでクロールで逃げるジェミーを、サメが追いかける。

それを見て、美那がクスクス笑い続ける。

事ここに至って、リリィは嫌な想像を確かめることにした。 マリーの肩を掴むと、強く揺すって問い詰める。

「あんさん、パイに何か変わったもん入れしまへんどしたか」

リリィの猛烈なゆさ振りにも堪えず、マリーが能天気にも答える。

「お台所に、美味しそうな木の実が置いてあったから、入れてみたら、これがもうデリシャスで」

「あああっ、やっぱり——」

リリィは、頭を抱えると、台所に確認に飛んでいった。

リリィの頭の中には、ジェミーとミレーヌの恐ろしい仕置きのイメージが、猛烈な勢いで渦巻いていた。

リリィが台所に飛んでいったのと入違いに、オフィスのドアをノックする者がある。

いつの間に着替えたのか、バニーガールのコスチューム姿のマリーがドアを開ける。

「はあい、どちらさまですかあ？」

「あの失礼します、グッドラック悪魔払い社はこちらで……」

ドアの前に立っていた一見温厚そうな老紳士は、開かれたドアの中で繰り広げられている異様な光景に、あいさつの言葉を途中で飲み込んで、啞然と立ちつくした。

「まあ、お客さまですね。 どうぞ、ご遠慮なくお入りくださいな。 いま午後のティータイムですの。 お茶をいれますから、こちらでおくつろぎください。 あっ、美味しいパイもありますのよ」

「それは——、どうも恐縮です」

マリーに促されて、違和感を憶えながらもソファに身を沈める老紳士。

その横を、背ビレに追いかけられたジェミーがクロールで通り過ぎていく。

「あの、お取り込み中だったのでは……」

洒落た花柄のティーカップに紅茶を注ぎながら、マリーが微笑んで答える。

「お気になさらないでね。 彼女は、トレーニングが趣味ですの」

老紳士は、ティーカップを受け取ると、ひきつった愛想笑いを浮べた。

「かなり、ハードなトレーニングのようすな」

マリーは、先程のパイを切り分けて、紳士にすすめた。

「どうぞ、召し上がってくださいな。 わたしの、手作りですの。 お口に合えばいいですけど」

「これはどうも。 ほう、美味しそうですね」

老紳士は、ほっとしたような笑顔を返した。

リリィは、キッチンに駆け込んだ。 焦る心を落ち着けてから、流しの横に置いておいた籠を覗き込む。 しかし、リリィの願いもむなしく、籠の中はほとんど空で、調理テーブルの上には、マリーがパイを作ったときの生地屑と、リリィが籠の中に入れておいた木の実の殻が散乱している。

リリィは、全身の力が抜けるのを感じた。

「ああ、最悪や。 まさかとは思ってたけど、やっぱり入れてしもたんか」

リリィは、しばし頭を抱えていたが、急いでオフィスに取って返した。

これ以上被害が拡大しないうちに、あのパイを始末しなければと思いながら。

リリィは、オフィスのドアを開けるや一番、叫んだ。

「そのパイ、それ以上食べたらあきまへん。 それには、マンドラゴラモドキの実が……」

リリィが、警告の言葉を言い終わる前に、視界に客の老紳士の姿が飛び込んできた。

「おお、これはまったくして、それでいて独特の風味が爽やかですね」

老紳士が、マリーのパイに感嘆の舌鼓を打っているところだった。

リリィは、部屋に飛び込んできた勢いのまま、頭から床にスライディングした。

「あかん、遅かった」

床に突っ伏して力尽きたリリィの回りを、サメに追いかけられたジェミーがいつまでも泳ぎ回っていた。

「それで、また何だってそんな危ないものを、台所に出しっぱなしにしておいたのよ」

半分ほど残ったパイを前に、しゅんとして椅子に座っているリリィに、正面に立ったミレーヌが呆れ顔で言った。

「サバトのための魔法薬を作ろう思うて用意してたら、お客はんが薬を買いに来はったんで、ついそのまま忘れてしもて……」

「それでマリー、あなたはそれを勝手に使ったというわけね」

「すいませえん。 ひとつ摘み食いしてみたら、あんまり美味しかったもんですからあ、つい……」

ミレーヌは、腰に手をあてたままため息をつく。

「もう、だから台所で薬なんか作らないでって、いつも言ってたでしょ」

リリィが言い訳するように、肩をすぼめて上目遣いにおずおずと言う。

「魔女の薬は、台所の大鍋でコトコトと煮るっちゅうのが伝統でっさかい」

ミレーヌは、頭痛を抑えるように、こめかみを揉む。

「さっきのお客さんは？」

「となりの部屋に寝かしときやした」

「もう、どうやって謝るのよ。 きっと、カンカンよ」

「でも愉快的な方でしたからあ、きっと許して下さいじゃないかと。 面白い踊りをいっぱい踊って見せて下さったしー」

「誰が、愉快地にさせたのよ！ ああ、頭痛いわ」

「よく効く頭痛薬おますけど……」

「あなたねえ——」

思わずトーンを上げたミレーヌの声に、横のソファで額に濡れタオルをのせてのびていたジェミーが目を覚ます。 彼女が一番たくさんパイを食べていたので、ダメージもそれだけ大きかったのである。

「怒鳴るなよ、頭痛えー」

「あ、気がついた？ 気分はどう」

ジェミーが、半身を起こして絞りだすような声で答える。

「腹へった——」

「そういえば、どたばたして忘れてたけれど、もう夜ね」

「けど、あの実は軽い酩酊作用はありますが、あないにひどい幻覚作用はあらへんはずですよ」

「うーん、きっとパイの材料と化学反応を起こしたんじゃないかしら。 けれど、あなたはどうして平気だったの？」

「さあ、一口しか食べへんかったし、前から儀式につこてましたさかい、耐性が出来とるのかもしれまへんなあ」

ボーッとして話を聞いていたジェミーが、タオルを頭の上に乗せ直しながら尋ねる。

「飯はー？」

今まで小さくなっていたマリーが、顔をパッと明るくして答えた。

「さっき晩ご飯に出そうと、いっしょに焼いたミートパイがあるんですよ。 美味しいですよー」

皆、その場に突っ伏すと声をそろえて言った。

「パイは、もういいよー」

その後、マリーの幻覚パイはミレーヌによって液体窒素で冷凍後嚴重に封印された。

あまりに危険なパイの効果が、悪用されないように。 もちろん、破棄することも考えられたが、いずれその薬理効果を解明したいというミレーヌの希望により、保存することに決められた。

ステンレス容器に危険物マークをぺたぺた貼るのを手伝いながら、マリーが言った。

「ミレーヌさんが、危険物取り扱い免許持ってて、よかったですねえ」  
間髪を入れずに、皆が突っ込みを入れたのは言うまでもない。